



馬耳東風

高校生のグループが山門をくぐった。伸びやかな弾んだ声が杉木立を越えて階段の辺りに響く。北鎌倉駅の道を挟んだ真向かいの瑞鹿山の扁額をくぐると山門に着く。「そんな贅沢な所へ行くんじゃないよ。禅寺へ留めてもらって、一週間か十日、ただ静かに頭を休めてみるだけのことさ」。山門を入ると、左右に大きな杉があって、陰気な空気に触れた時、世の中と寺の中との区別を急にさとした。はじめて風邪を意識する場合に似た一種の寒気を催したと記す。20代の夏目漱石が参禅し、小説「門」の後半に登場するモデルとされる鎌倉五山第二位の禅刹・臨濟宗円覚寺の山門の表現だ。天明3年（1783）に再建の二重門は非常に質素で、粽形丸柱で中央に紅梁、梁行2間桁行3間の素通しである。仁王は鎮座せず楼上に観音・神将・羅漢を祭る。自然体の構えはまさに禅寺の持ち味だ。山門は県重要文化財で、空・無相・無願の三解脱門を象徴し煩惱を取り払い、娑婆世界を断ち切り、清浄な気持ちで参拝するのだ。釣鐘と舍利殿は国宝で、漱石が参禅した塔頭の帰源院は右手階段上の弁天堂の奥になる。境内にある大木のビャクシンは雷が落ちたのか縦に裂け、木肌が剥きだしなのが痛ましいが、丁寧に養生してあるのがいかにも寺らしい。荘嚴な釈迦像に合掌、本尊を護る天井画の竜が圧倒する。日常の作業なのだろう一輪車を引く禅僧に黙礼、山影が映る妙香池の手入れ人に声掛けすると老婦の笑顔と明るい返事が返ってきた。静の中の動という感覚だ。一段高く塀に囲まれ

た佛日庵の門の内に、苔庭と戦前に魯迅が贈ったモクレンやタイサンボクが趣を添え開基廟に香が絶えない。小説「門」が描く主人公は淋しい孤独な人間で、安心と悟りは容易に得られない。それこそが求道者としての漱石の面目なのだろう。木村游は「私の漱石」—その魂のありどころ—（至芸出版社1987）で、小説といわずに文学といったことに特徴を見だし、自分の捉えた人生を自分の生き様で証すことで本来の自分に立ち返り、そこに生きる原理を提示し、自分自身に成り切ったとしている。

夏目漱石は没後100年を経た。自然主義にくみせず、近代的個人主義の立場から人間の心理を追求した。人間の生きる根源を求めて命がけで生きてきた己を表現し、魂のありどころをえぐる文学を世に著した。評論家・山崎正和は先取りしたポストモダンだと述べている。

生きる意義を求めて人々は苦悩する。禅宗が修業法の第1とする座禅は、精神を集中し無念無想となることを目指す。人生を娑婆と隔離し迷いを解き放ち、無の境地に誘い込む極限の手法だが過程であり到達点ではない。結界は生き方を問う東洋の精神性の境界としての認識である。東日本大震災で被災した野蒜海岸で、地元の立ち枯れ杉を伐採し、丹色の鳥居を手作りで設置し、初日の出に備えた日本人の持つ東洋心理に共通する精神性をみた思いだ。鳥居は古く神に供えた鶏のとまり木の意という（国語大辞典 小学館）。西年の年頭に当たり、まさしく門前に立ち心新たに結界を越える気概と勇気を持つことだと考えた。

（柏）